

前立腺肥大症に対する手術 古くて新しい泌尿器科の標準治療

企画にあたって

この時期、新しく泌尿器科医となった若い後期研修医の先生たちが、膀胱鏡の操作に悪戦苦闘している光景をよく目にします。私が若い頃も、まずは膀胱鏡検査において、特に男性への無理のない内視鏡の挿入と、膀胱内のローテーションが理解できるようになれば、次のステップに進めると指導されました。その次のステップの1つが、経尿道的前立腺切除術 (transurethral resection of the prostate : TURP) でした。

私が TURP を始めた 20 年前は、先輩医師たちに、「昔はモニターなんかなかったから、後ろから執刀医の手や肩の動きを見て手術を覚えたものだ」とか、「ときどき執刀医に内視鏡をのぞかせてもらったけど、血だらけで結局何もわからなかった」と、手術習得の難しさを武勇伝のように語られ、手術用モニター登場による革命的变化を強調されたものでした。そして、この 20 年の間に、前立腺肥大症手術もさらなる変化を遂げました。機器開発の進歩とともに、多くの新しい術式が開発され、最近では有効性のエビデンスが数々の大規模 RCT により蓄積されつつあります。しかしながら、どの術式にも一長一短がありますし、TURP は今でも標準術式であり、必ずしも劣った術式というわけではありません。本年 4 月に改訂された『男性下部尿路症状・前立腺肥大症診療ガイドライン』にも、「それぞれの術式にはそれぞれの特徴があり、手術治療の術式選択は、前立腺肥大症の特性、前立腺以外の患者特性、医療施設の設備、術者の習熟度などを考慮して行う必要がある」と記載されています。

そこで本特集では、「前立腺肥大症に対する手術—古くて新しい泌尿器科の標準治療」と題し、各術式の特徴をエキスパートの先生方にご執筆いただきました。前立腺肥大症は良性疾患であり、目的が患者さんの QOL を向上することであるため、奥が深い手術です。各エキスパートの匠の技を、明日からの診療にお役立ていただければ幸いです。

福島県立医科大学医学部
泌尿器科学講座

小島 祥敬